

史 蹟

而施現益者實不邦家之大鎮哉凡所計役夫石工之費皆以出乎檀君併大夫崇重則五嶽不崩盛事也回記梗槩
貽乎後昆云

其銘曰

鬱其維嶽

靈蹤不空

藏達摩寶

現佛馱工

弓壞塵累

劍起雄風

於乎萬歲

保国無窮

寛政壬子秋九月戊末

誕生院權僧正 寛 充 誌

満 濃 池

池地の状況

満濃池は本市内に所在する池ではなく、隣の満濃町にある溜池である。しかしその池水の受益面積の大きな善通寺市として、また、本市出身の弘法大師の関与することが大であった溜池であることからしてもこの池については市民として知悉しておく必要がある。

本市の東辺一六路を貫流する金倉川の源は阿讃山脈に発する。それらの谷々を合流地点でせきとめて、日本一の



満濃池

溜池といわれる満濃池はできている。この溜池は、東南から合の股谷・葦谷・五毛谷・もつこく(長)谷・儀衛門谷、獅子谷・金六谷・象頭谷・三田中谷・艾谷・駒が谷・等一一の谷水が流入しており、池の北部は山も浅く、竜が住んだという伝説ある蛇谷がある程度である。

阿讃の山々に雨が降る。その雨水は江畑方面に次第に集って主流をなし、やがて南東かららの五毛谷が合流する。その合流点の少し下流に近く、太古から豊富な湧水があったという、人々はこの湧井に「天真井」と名づけた。平坦地で稲作をはじめた弥生時代から、人々はこの井水周辺に住んで生活用水・灌漑用水とし、水神を祀って崇めていたという。

それらの湧水は五か所ほどあったと伝えられ。古老の言によると、現在でも池水に埋まっている地点、中央よりやや西南によった三田中谷口の池中に湧水口があって、その豊富な水量は優に五〇町歩以上の田を灌漑できるといわれている。

新田が開拓され土器川・金倉川流域の沃野に稲作が増加してくると、雨量の少いこの地としては、用水確保に困ることが多く、また旱害にそなえて、この出水地を掘って堀をつくり、溢水の流出口に土堤を築いて大きく水を溜めることから次第に溜池として発展したと考えられる。

萬農池後碑文

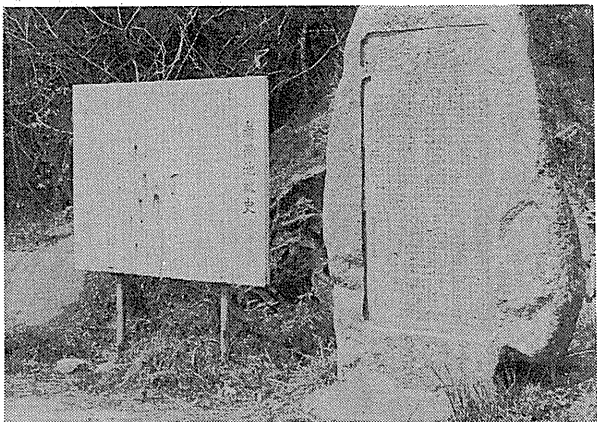
さて、満濃池はいつ頃、だれの手でつくられたのであろうか。

名古屋市の真福寺に、所蔵される「弘法大師伝」の裏書きに「萬農池後碑文」がある。この碑文文末の添書きによると寛仁四年(一

〇二〇)、平安時代の中頃書かれたとなっており、弘法大師の入定されたのが承和二年(八三五)三月二日、萬農池の築堤に成功されたのが弘仁十二年(八二二)年七月だから大師の時代から凡そ二〇〇年後の文であることがわかる。

この碑文は宮内庁図書寮の「続群書類従」や、多和文庫の「大政官符讃岐国萬農池裏書」にもでており。讃岐国官社考証や香川叢書に記述せられ、石碑として堤防上に建てられている。これによると、「この池は大宝年中、国主道守朝臣が築いたものである。この堤は前の世に頽破したというが文書もなくなりその実は誰も知らない。

近くは弘仁九年(八一八)に流破したが再び官吏を下し三年の内に築いた。仁寿元年(八五一)の秋に天下に大水がでて堤上をあふれ、国中の池がごとく破れた。翌二年春、二国に飢饉があり、早魃が八〇余日続いて国は衰え民は窮した。八月に国主の弘宗王が朝廷の諭旨により、諸郡を巡って損害状況をしらべ、苦しんでいる百姓を慰撫し、二〇〇余人の人夫で堤を築き五日でできた。十月に又破れたため、二月に人夫六〇〇〇余人で約十日で完成



池後碑文

したが、まだ少し低いので翌春三月人夫二〇〇余人で更に一丈五尺にかき上げした。」云々とある。

要するにこの文は、弘宗王の頌文で、弘宗王というのは国守で手腕をもった人であったが、任地の讃岐でも、越前でも汚職のため百姓に訴えられて罪になったほどの人である。この碑文の撰文は彼の腹心の部下が当たたらしく、宣伝臭が強いといわれている。

「今昔物語」は、この碑文より五〇年ほど後の書であるが、大師の治水にふれている。

「讃岐の国那珂郡に、萬濃の池とて大いなる池あり、高野の大師の、その国の人々を哀れまんがために人を催して築きたまえる池なり。池のまわり遙かに遠くして堤高かけければ、更に池とは思えて海なぞと見えにける。広きは彼方かすかなる程なれば思いやるべし。」とある。他の色々な記録にも大師の治水が明記されているのに、この碑文では、「近くは弘仁九年に流破したが、再び官吏を下して三年の内に築いた」と、いとも簡単に記して弘法大師の治績を完全に無視し、次の仁寿元年の決潰と弘宗王の功を大きく拡大して書かれている。

弘仁の大決潰

さて記録に残る第一の大決潰が、嵯峨天皇の弘仁九年（八一八）に起った。大化の改新、大宝律令の制定で、朝廷は、「土地国有化」をたて前として班田收授の法を定めた。従って、国有の土地の灌漑をする用水施設としての池も国有であるから、国が修築しなければならぬときめ、萬濃池の築池使として、弘仁十一年（八二〇）に、路真人浜継が讃岐へ派遣された。彼は、治水の大家であり、その先祖は難波王といひ敏達天皇の皇子で、名門であった。

現地へ来てみると、堤は押し流されて泥土がはらんし堤の位置に金倉川の水があふれていた。彼が労働力とし

てたよりに行っている農民は、この弘仁九年の大雨、大洪水・翌一〇年の大旱魃・ひきつづき一年もの旱魃で食糧難にあえぎ、中々思うように集まらない。堤の基礎固め、構造のくふう・築材あつめ・労働者集めとその配分・雨天対策・食糧・工具・事故対策・救急措置・功食（賃金と給食）配分・等困難な問題と対決せねばならず、しかもその対象となる溜池はただの溜池ではなく、

萬濃池とはいわじ海原の

八十島かけて見る心地なり

と古歌にうたわれた日本一の大池である。

讃岐の国司清原夏野は、浜継に協力して築堤に努力していたが、思うに任せぬ工事の進捗状況を見て、その昔、名僧行基が大和地方で灌漑土木工事に見事成功した例を思い出し、讃岐出身の空海の令名の高いのをみて、その法力と知脳を借りたいと考えた。

空海の築池別当

そこで、朝廷に奏請文を送り、空海の出張を奏請した。

当時の空海は、嵯峨天皇をはじめ貴族たちの信任を得、しかも勅許を得て高野山で、金剛峯寺の建設にかかっていて多忙であった。そこで折角の要請も、朝廷の認承を得られず、築池使の路真人浜継の懸命の努力にもかかわらず工事は容易にはかどらなかつたので、ついに、国司清原夏野は、再度空海の派遣奏請文を提出した。

「空海は、当地の出身で徳が高く有名な方で、山中で坐禅すれば鳥獣も安堵するほどの大徳の僧であります。唐へ渡って多くの学識修法を身につけて帰られ、僧俗貴賤みな空海を慕い、家に在れば多くの人々が訪ね来り、家を

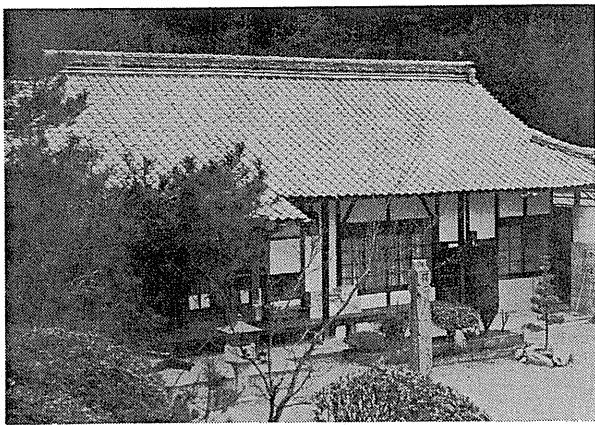
出れば多くの人がついて来て教えをうけるさまです。讃岐の人々は父母のように空海を恋慕っています。浜継等が去年から工事に努力していますけれども、池大きく、働く人少なく、完成のめどがつきません。もし空海が築池のために帰国されるときけば、讃岐の人々は、とるものもとりあえず駆けつけて工事を助けることでしよう。どうか、空海を築池別当に任じて、池の完成を一日も早められるようお願いします。」朝廷はこうした再度の奏請に動かされ、協議した結果ついにこれを認めた。

空海築池工事に着手

そして清原夏野のところへ認可の下文が届いた。「築池の功料は国費です。空海への供養料は讃岐の田祖をもってあてなさい。」そして讃岐へ下る道中の国司達にも、「空海が勅命によって讃岐の萬濃池の築池別当として下ることとなったから、道中の国々の国司は、宿や食の便を図りなさい。」と下達した。

こうして空海は、沙弥一人・童子四人を従えて、道中多くの人々に見守られながらこの地へ帰って来た。そして築池工事の現地で多くの人々の歓声に迎えられて、真野の、現場で工事を推進している矢原正久の家に入った。今までの必死の努力で工事はやや進捗していたが、谷々の水を集めて流れでている金倉川の水口のところの堰と、その周辺一帯にうける水庄に抗する主堤防の構築が残っていた。空海はまず、護摩壇を設けさせ、その壇上に座して修法を行い、この大工事の完成を祈った。空海上人帰るといふ噂は忽ち津々浦々にひろまり人々は四方から集まってきた。

空海はそれらの人々に、この工事の意義と自分の使命を説いて協力を要請したところ、人々は仏の加護を祈り争って工事に参加し心を合せて懸命の働きをするようになったと伝えられる。



神野寺

いよいよ、最後の仕上げ工事にかかり、金倉川の流出口を閉ざす堤防をつくるに際し、空海は現今の土木技術で施工しているアーチ形の堤防にして水庄に耐えられるようにし、また満水した水が堤上をこえるとそこから決潰するので、余水の落し口（「うてめ」と呼ぶ。）が必要であり、この「うてめ」の工事として、岩山の岩盤のところを切り開く特別の工具と工法を考えて施工したという。この「うてめ」は長らく残っていたが近年の築堤工事により、今は堤中へ埋まっている。昔の人はこの岩を名づけて「お手斧岩」と呼んでいた。こうしてさしもの難工事でも空海がきてから、その徳望を慕い仏果を得ようとする民衆心理、空海の工事に対する科学的技術的な工夫、そして巧みな人心操縦と組織管理により僅かに二か月後の弘仁二二年七月をもって完成した。

朝廷は、空海の労をねぎらい、功を賞して新銭二万貫（一部記録には十万貫）を施与したといわれているが、空海はこの金の一部をもつて池畔に神野寺と、善通寺の甲山の麓に甲山寺を建立した。

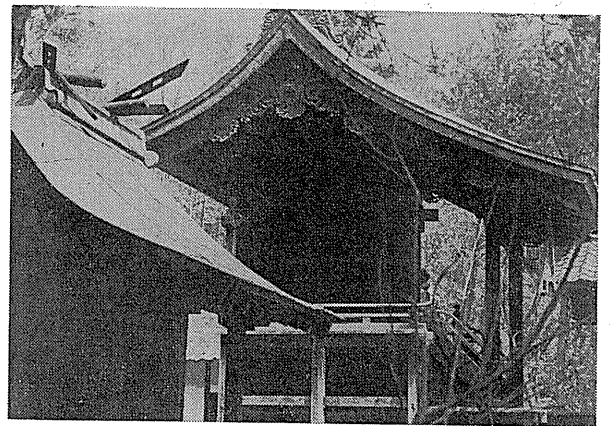
日本紀略によると、当時の萬濃池の周囲は二里、五町（八・二五町）、面積は八一町歩（八一町）ほどであったと記されている。

いかに名僧空海の指導による築堤とはいえ、時が立てばものはいたむもの、まして古代の土木材料や技術の程度からすれば持久力にも自ら限界があり。第五十五代文徳天皇の仁寿元年（八五一）にまた大決潰し、翌二年人夫二〇〇〇人、翌々年には六〇〇〇人、次の四年には更に二五〇〇人あまりの人夫で堤を一丈五尺に嵩上げして八丈としたという。

元暦の決潰

元暦元年（一一八四）五月一日、大雨によりまたまた萬濃池の堤防が大決潰し、山津波となって金倉川流域一体に大被害を与えたと伝えられる。当時は源平合戦がたけなわで一の谷合戦、屋島合戦と、翌二年にかけて、戦乱がつづき、寿永と年号が変わって平家滅亡となったのである。百姓達は、水害のあと、毎年旱害に悩まされて、池が一日も早く修築されることを熱望したことであろうが、乱世のこととて修理することなく、鎌倉南北朝・室町・戦国とついに四五〇年間にわたって放置されたのである。

池には水が溜まらず原野となり湧水を利用して農耕にはげみ、村落ができて数十戸の百姓が矢原家を中心に「池内村」という集落を形成していた。従って、それより下流では泥水で押し流された荒廢の地を復旧するのに長期の苦しみをなめ、折角田畠を耕作しても、いわゆる讃岐日照りがつづけば灌漑用水の不足で困り続けたであろうこと



神野神社

は察するに余りある。こうして、打ちつづく戦乱の数百年を農民たちはがまん強く耐え忍んで、江戸時代に入るのである。

西島八兵衛による再築

その後満濃池の修築については寛永十七年の頃の記述では、二万三〇〇〇石ほどの実収で、那珂郡よりは二万五四八〇石五斗五升、多度郡よりは一万八三九五石七斗二升五合の収入があった。それほど実収の上った裏に次のような努力があったのである。

寛永三年（一六二六）生駒高俊の頃、九五日の長期にわたって雨が降らず、大旱魃となった。生駒家は代々、政策として新田開発をすすめており高俊の舅、藤堂高虎の家臣に西島八兵衛之尤があり、彼は治水の大家であった。高俊は舅に乞うて、西島八兵衛を顧問として土木事業を施工した。八兵衛は木田郡の三谷池・神内池等大小九〇余の溜池を築いたり、春日新田を開拓したりして、大いに藩の実収を高めたのである。こうして旱魃を、人間の努力による溜池の水によって克服する努力が讃岐米を支えてきたことがわかる。

満濃池の再築工事もこの治水に秀れた西島八兵衛の手によって寛永五年（一六二八）一〇月に起工し、足掛四か年目の同八年二月に竣工した。

当時の水掛り覚え書きによれば、那珂、鶴多・多度の三郡四四か村で三五八一四石二斗に及び、讃岐一国の六分の一の収穫であったという。

多 度 郡		那 珂 郡	
○吉原村	700 石	真野村	400石
○山階村	1,181.8石	岸上村	500石
○奥(白方)村	200 石	樋 <small>の</small> 外 <small>村</small> (今の池尻)	50石
○青木村	860.9石	吉野村	1,600石
○三井村	300 石	榊梨村	630石
○庄道福寺村	600 石	○与北村	500石
○葛原村	560.3石	○木徳村	1,933石
○多度津村	947.5石	○平家(川東村) (上金倉の一部)	200石
○堀江村	745 石	金比羅院内廻り	93石
○中西方村	150 石	苗田村	861石
○吉田村	700 石	榎井村	822石
○善通寺	286.9石	高篠村	271石
○生野村	1,700 石	垂水村	1,956石
○弘田村	1,000 石	郡家村	1,586石
○大麻村	700 石	○金倉 <small>上下</small> 村	800石
	900 石		
	500 石		
以上合計	12,785.2石	以上合計	19,869石

○印は現善通寺に入っている地区

安政の大決潰

寛永年間、西島八兵衛の再築後も、池水を流すための堅樋たこ、底樋そひは木材造りであるからいかに耐水性のある栗材などを用いても、しばしば腐朽するので、その後の記録によると一五回の修営を重ねている。そしてその後の、嘉

永二年(一八四九)、榎井村の庄屋の長谷川喜平次は、木造ではどうしても腐朽するので石材で造ってはどうかと考え、郡民代表と相談し賛同を得て役所へ許可申請し、その後数年かかってやっと安政元年にはすべてを石材に変えることができた。

しかし完成したのも束の間、この年六月に例の有名な「安政の大地震」が起り、各地に大被害を与えたこの大地震で池の大樋管だいひくわんの側壁にこれまでに水の滲潤しんじゆんしていたところがあったのが、ついに亀裂を生じて水が噴出しはじめた。何とかしてこれを押えようと努力を続けたものの、まだ完全に修理できぬうちに大雨となり、ついに樋底からの漏水が次第に増大して七月九日の夜、あふれる水が土砂を流し、またまた池の堤防が決潰してしまった。どつと流れでる水は奔馬の駆け荒れるように溢れて那珂・多度両郡に漲りみなぎ一挙に数か村の緑したたるばかり生育していた青稻は泥土に覆われ、家は倒壊して流れ、死人傷人数をしれず、牛馬の命を失うもの傷つくものまた多く、一夜あけて、命拾いした農民たちは、水のひいたあとの一面の泥田に呆然としてつつ立っていた。やっと気をとり直して復旧に当たったものの、不作のために饑餓きうがにあえいでいる農民達の上に、再び一月四日の大地震が襲った。

家の傾き倒れるもの多く、人々は屋外に避難し、翌五日や小震となったが、その後もしばしば余震が打ち続くのでついに戸外に板小屋をつくって寝食すること一〇日ほどに及んだという。こうして民家の破壊するもの数千戸におよび、余震は翌年の夏頃まで時々続いたと伝えられる。

満濃池が無くなると当然濁水かすみづが続く、川水と湧井の水だけの灌漑では限度があり、あちこちで流血沙汰の水争いが起った。農民はくる年もくる年も我田引水にあせり早魃と洪水に泣いたのである。

そして何としても満濃池を復旧しようと図ったが、広大な全流域が被災しているため、先立つ復旧のための費用

を生み出す収入源がなく、時は幕末で黒船の到来、尊皇攘夷の運動の渦中にあり、世情騒然として政治の空白を生き以後一六年の長きにわたって放置されていたのである。

明治の復旧工事

明治三年（一八七〇）、榎井村の豪農、長谷川佐太郎はさきの嘉平治の志を果そうと東奔西走して満濃池復旧を図った。幸いに高松藩の藩政の松崎浪右衛門がおり、よく理解して協力支援してくれた。

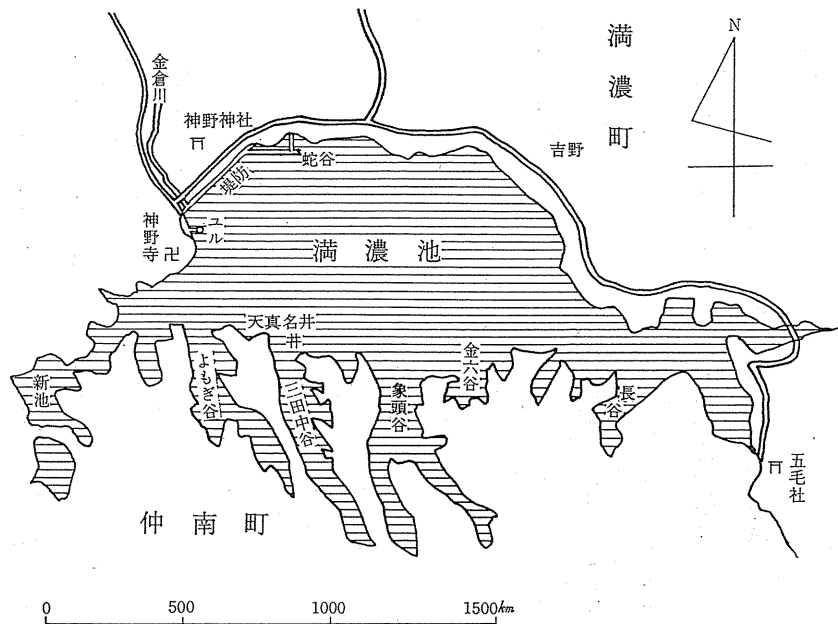
佐太郎は、問題の石の樋に代るもの考えたあげく、岩山にトンネルを掘って、ゆるぬきによって溢れる急流をさばくことを考えて着手した。この復旧工事は当時の金で二万八〇〇〇円という大金であった。この多額の経費の収入の見込みがなく、佐太郎は自分の財産でまかなったが彼が復旧工事に充当した費用は一万数千円にも及んでいる。そうしてついに長年の庄屋の家も破産し貧窮の中にこの世を去った。この工事に働いた労務者は延べ一四万五〇〇〇人というから、今の賃金に換算すれば数億の高額となるであろう。

その後の用水事情

明治二十七八年の日清戦争後、勝利に酔う国民は三国干渉の冷水をあび遼東半島の還付となり、軍備拡充によりロシアに備えようとし、第十一師団が設置されることとなり、高篠の地が候補にあがったが、度重なる満濃池の堤防破壊による被害の歴史からついに沙汰止みとなり、善通寺地区へ決定したのである。

百姓にとって用水は生命にも等しい。この池は明治三八年以来二度嵩上げと、修築工事をしたがまだまだ水不足であった。早越の年にはしばしば水争いによる血の雨を降らすいさかいが起った。

史 蹟



水利慣行は法律以上に優先し、配水規制は嚴重で、反別割り、時間水、石高分水位、練香水などの苦肉の方法が生れ、いざ早越ともなれば、我が子のような稲のために土瓶水、雨乞念仏とあらゆる手を尽すなど水引き当番は実に命がけであった。水上の者は当然の如く水下の者に権力をふるった。

昭和の県営土木工事

まだまだ早天が続けば水不足で困ったので、貯水量を二倍にしようという運動が起ったのが大平洋戦争が始まった昭和一六年のことであった。堤高全体を更に六尺かさ上げしようという計画である。しかしこの県営工事計画も、敗戦前後の混乱時代のことで、中々はかどらなかつた。

そして敗戦の傷跡が次第にいえてくると共に、復旧のきざしが見えはじめた。

池の貯水量がふえれば、その灌漑地区がふえ灌

漑地区が拡がれば、その池水の及ぶ限りの地区に治水・利水の工事が拡大する。

貯水能力がふえても、平年の雨量だけでは不足するので、琴南町造田の天川地区に堰を設け、山腹にトンネルを穿って川水を導入するなど工事も行われた。

大工事完了による満濃池

こうして昭和三四年、第三次かさ上げ工事が完了し、この膨大な、長期工事が完成したのは実に着工以来一七年ぶりであった。

六ヶ全堤のかさ上げ工事が完成したため、総貯水量は七四〇万トンから一挙にその二倍の一五四〇万トンとなり需要水量をはるかに上廻るだけの貯水能力をもつようになった。また香川用水工事の完成により吉野川の水を導入し、今後の市民たちは、その祖先の苦勞が安心して耕作することができるようになった。

県営「満濃池用水改良事業」に併行して、同じく「金倉川沿岸用水改良事業」また同じく、「満濃池土地改良事業」が昭和一五年一二月発足して、「天川頭首工」「満濃農地放水路」「幹線水路改修」等六億三〇〇〇万円の巨費を投じて、同じく一七年ぶりに完成を見た。名実共に日本一の大溜池の完成である。新満濃池は、堤防長一五五・八呎・堤高三二呎・満水面積一三八、五平方呎・貯水量一五四〇万トン・放水幹線用水路一三線・幹線水路総延長五五三三八呎灌漑面積四六〇〇畝（現在受益面地は三四〇〇畝）・受益戸数七九〇〇戸である。

池水は配水委員会によって系統化し、慣例を基にしてスムーズに配水が行われ、地域一体の田地は黄金の波をうたせることができるのである。

現行受益面積の内訳

1	丸亀市	一四九四・〇畝
2	善通寺市	一二六七・五〃
3	満濃町	七七四・三〃
4	多度津町	七一七・一〃
5	琴平町	三四五・七〃
6	仲南町	〇・一〃

これで見ると、満濃用水の利用は丸亀市が最高で、地元満濃町のほぼ二倍に近い受益面積をもち、わが善通寺市がこれについて、地元満濃町より約五〇〇畝多い受益ぶりである。つまり祖先伝来、この池のおかげを蒙ることすこぶる大きいといえよう。